

I

次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 75)

文系学問の置かれた位置

世界大学ランキングの順位は大学の国際的なブランディング(注1)にとって有効な資源となる。それゆえ、政府から出される日本の大学の国際化戦略では、世界ランキングでの順位を上げることが数値目標とされてきた。「スーパーグローバル大学創成支援事業」がその典型である。だが、私の経験からすると、理系分野はともかく、文系Aまで含めて日本の大学がランキング上位をめざすことは相対的に難しい。その冷静な現実認識から議論を組み立てるべきである。

世界ランキングの評価で、日本の有力大学の順位が振るわない理由の一つは、国際化の遅れだといわれる。留学生や外国人教員の数、あるいは国際共著論文(主に英語)数やその被引用数などで示される評価基準である。なるほど自然科学や医学、工学の分野では、論文発表が英語で行われることが通例化している。しかも、大学が立地する国の文化や歴史によって、研究成果に差が出ることは前提とされない。知識の一般化や普遍化を前提に研究が行われる。それゆえ、研究業績についても、そこで行われる教育においても、世界共通の評価基準を前提にできる。ランキングで使われる「客観的な」数値評価になじむゆえんである。

B それに対し、人文社会系の学問の多くは、その学問が発達した国や地域の特徴——歴史や文化(言語を含む)、地政学的特徴など——を反映させることで価値を生む。それぞれの地域間の共通性やある程度の一般化とそれに基づく理論化の可能性をないがしろにするわけではないが、地域特性を考慮に入れた知識の体系が、その地域を越えて意味を持つ(それゆえその知識を共有することにも価値がある)という前提で研究が行われる。あえていえば、地域の特性によらず、どこにでも当てはまる「普遍的な真理」の追究が行われているわけではない。

このような学問の特性を考えると、日本の文系分野は、理系分野とは異なり英語圏のトップ大学と同じ土俵で競争しているわけではない。しかも、そのことに自覚的である方が、世界ランキングでは評価されにくい日本の大学の強みを発揮し、その国際的な貢献度を高めることができるはずである。

もちろん、人文社会系でも、いわゆる西欧中心主義の影響は強かった。人文学や社会科学も、西欧において学問として成立した。非西欧圏の学問も、その影響を強く受けて発展した。それゆえ、現在でも西欧の言語(とくに英語)で書かれた研究がそれ以外の言語で書かれたものより注目を集めやすい。とくに社会科学の分野の多くでは、戦後アメリカが研究の中心となったことから、アメリカの学術誌に掲載された論文や、大学出版会で出版されたモノグラフへの注目度(注2)(その結果としての被引用件数)が高くなる。勢い、その分野の「最先端」を学び、研究するためには、アメリカを中心とした英語圏の大学のほうが有利である。文系を含めた総合的な大学ランキングで英語を母語とする国々の大学が上位を占める所以ゆえんである。

非西欧語圏に属し、英語からもっとも隔たった言語の一つを母語とする日本人や日本の大学にとつて、そこで互角に渡り合うことは、所詮、無理というものだ。理系のように数式や化学式といった「I」を持たず、言語表現自体が研究にとって価値を持つ分野だから、なおさら母語以外での教育・研究のハンディが大きくなるからである。そのことを事実として受け入れると

ころからしか、まっとうな政策は考えられない。

甲

非西欧圏の大学でも人文社会系で国際化をとげている国々がある。多くは旧植民地国の大学である。こうした国々と比べた時、日本の強みは、日本語というローカルな言語で教育、研究ができる面にある。150年におよぶ近代化^{II}西欧化の経験は、入学問と擲^や揄^ゆされながらも、西欧的知識の日本（語）化を可能にできた。修士課程くらいまでなら、翻訳書や日本語で書かれたテキストを通してほとんどの基礎知識を学ぶことができる。博士課程でも隣接領域の研究については日本語化された知識で対応可能だ。自国の歴史や文化を研究する場合でさえ、先行研究として西欧語で書かれた文献に頼らざるを得ない多くの非西欧圏の国々との大きな違いである。

それゆえ、外国語習得が^aフカヒなこれらの国々の大学が文系でも国際化しやすいのとは対照的に、母語で学び、考え、研究できる蓄積があることが日本の強みであると同時に、^D日本人の外国語習得の必要性を低めている（その結果、ランキングの評価も低くなる）。

しかし、150年をかけて西欧中心主義と向き合ってきた経験の蓄積は、裏を返せば、それ自身が知的資源となる。西欧の知識を取り入れつつ、それがそのままでは日本の歴史や文化、社会を説明する上で、間尺が合わないことを意識せざるを得なかった「日本という経験」である。西欧を含め、日本以外の地域や社会を研究する場合でも、日本の文化や歴史といった経路依存の影響がどこかに反映してくる。西欧中心主義に近づこうとしながらも、西欧で行われてきた研究とは違う視点や解釈が入り込む余地が生じるということだ。

日本自体についてはもちろんのこと、日本以外の国や地域の研究にしても、このように^E差異化する視点を有効に示せば、欧米の大学とは異なる特徴を持った人文社会系の学問は世界に通用するはずだ。ちなみに私の^(注三)いる大学でも、アメリカ中心の人文社会科学から差異化するために、イギリスの経験をかいくぐった地域研究——たとえば中東研究や中国研究——が行われている。こうした差異化が優秀な研究者や学生、資金を引きつける知的な資源になると考えられているからである。日本でも、欧米での研究とは異なる視点から研究が行われていること、それがとりわけ非西欧圏の国々にとっても意味を持ちうることを示せば、日本という経験自体が知的資源となる。

非西欧圏で、先進国の仲間入りを果たした国々が増えるにつれ、西欧諸国を含め、西欧中心主義への批判的な見方が共有されるようになりつつある。産業化や民主化をはじめ先進社会をつくり出す過程に、西欧モデル以外の多様性があることを認めざるを得なくなってきたからだ。これらのことも、文系学問が多様な視点を受け入れる **II** を後押ししている。西欧中心主義から発展したモデルでは説明できない社会の変動がいたるところで生じている。このような流れをうまくとらえれば、近代化以前の日本という経験を含め、150年かけて日本の大学が蓄積してきた人文社会系の知は、^F日本の大学の強みに転換できる有力な知的資源となる。

乙

理系と同じ枠組みで文系の学問を評価しようとしたり、英語による授業や外国人教員を増やすことで、グローバル化対応をめざすことは、質よりも量の面を重視した日本の大学の「国際指標」の

強化に見える。だが、そのような方向での国際競争力の強化は、日本の文系学問の強みや、それが日本の国際的貢献につながる可能性をかえって弱めてしまう。「スーパーグローバル大学創成支援事業」で、「外国人教員等」を増やすことがベンチマークの一つとされ、その実態が1年以上3年未満の海外経験しかない日本教員の増加といういびつな形になっている。これは質より量を優先させる政策の典型である。英語で行われる授業数を増やしても、さらには外国人教員「等」を増やしても、前述の日本の強みを発揮することにはならない。英語で授業が行われると、その質が簡単に国外からも見えるようになる。それゆえ、質の向上を伴わなければ、量の拡大はかえって日本の大学のブランド力を弱める結果となる。

研究面でもいくつかの人文社会系の学会が英語で学術誌を発行するようになった。これも英語による「発信」の機会を増やそうという試みである。だが、一部を除いて、これらの学術誌に掲載された論文が世界で広く読まれ、引用されるようにはならない。学術誌の国際的な評価の土俵にのらないからである。さらには、学術誌の国際的なプレゼンスの問題だけでなく、研究の質が問われるからである。ここでも、ともかく英語で発信しようという、質より量の姿勢がまさっている。日本語から英語に言葉を換えたところで、それだけでは海外の読者を引きつける日本の強みを発揮したことはない。日本発の研究であることの強み（欧米の研究とはひと味違う点）をアピールするような視点と論理構成を取らない限り、海外の *Japanese Studies* の（それもごく一部の）研究者以外には関心を持たれない。

裏を返せば、^Gアピール力のある強みを引き出すプロデュース力が日本の文系学問に求められているということだ。それを^bジユクチしたアドバイザーやエディターも必要だろう。海外の研究と日本の研究との橋渡しとなる専門家である。

一方、現状の日本の文系学問の国際化は、海外との交流もあり外国語のできる「国際派」と、国内での業績づくりに^cフシンする「国内派」に分かれ、同じ分野にいても両者の協力が得にくい状態にあるとき。日本発の研究の強みを発揮するためには、研究の厚みが重要となる。国内派を巻き込んだ国際戦略である。日本語で書かれた研究をもとに、日本発の研究の強みをアピールできる形の編集作業を伴う外国語での出版（翻訳を超えた翻訳）に力を注げば、国内派の業績の蓄積がものをいうようになる。そのためのプロデュース力・編集力の強化が質の重視への政策転換の第一歩となるだろう。

いたずらに^H世界ランキングの評価になじみやすい理系の研究の評価枠組みを適用した量の戦略は、日本の文系ではお門違いである。表面的な国際化が大学の^dヒヘイをもたらすだけで、国際貢献どころか、国内での貢献力も低下していく。

グローバルな視点から日本という経験の意味をとらえ直す、質の高い人文社会系の学問を生み出していく。日本人研究者自身にも気づかれていない強みの発見を含め、質の強化を図るための人文社会系へのサポートが必要だ。^eスノの強化を含めた政策である。そうした質重視の政策は、長い目で見れば、ⁱ国際貢献にも資するはずだ。日本というブランド力の強化にもつながる。

「役に立つ」大学ということがいわれ、文系学問の価値が日本では軽視されつつある。経済成長や科学技術の発展にとらわれた発想である。だが、知の生産にはそれとは異なる貢献の仕方がある。普遍的真理の追究といった基礎科学とも違う貢献である。

世界のことをよく知らなければ世界をよくできない。「日本という経験」は、世界を理解するための知の **Ⅲ** に貢献できる。その可能性を孕む^{はち}、日本の大学に蓄積された人文社会科学の知的基盤を見直すと、ランキング争いで弱みは強みとなる。(西洋の)知識の日本化を含む「日本という経験」自体が、日本の研究に個性を与えてくれるからだ。自然科学との、この決定的な違いを自覚して大学政策を立てないと、政策の誤りはその知的基盤を突き崩すことになる。日本の大学の国際貢献の芽も摘むことになる。何のための大学のグローバル化なのか。その根本の問いを改めて問い直すことが必要だ。

(荻谷剛彦『オックスフォードからの警鐘ーグローバル化時代の大学論』中央公論新社2017年)

(注一) ブランディング：ブランドを形作るための活動。

(注二) モノグラフ：一つの主題について書かれた論文や小冊子。

(注三) 私のいる大学：イギリスのオックスフォード大学。

(注四) ベンチマーク：基準となる指標。

(注五) プレゼンス：存在、存在感。

(注六) エディター：雑誌や書籍などの編集者。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は **1** ～ **5**。

a フカヒ

1

b ジュクチ

2

c フシン

3

d ヒヘイ

4

e スソノ

5

問2 空欄 I) III に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 6) 8 。

- | | | | |
|---|--------|--------|--------|
| I | ① 単純記号 | ② 複雑記号 | ③ 元素記号 |
| | ④ 文字文化 | ⑤ 記号文化 | ⑥ 超複雑性 |
| | ⑦ 共通言語 | ⑧ 純論理性 | |
- 6

- | | | | | |
|----|------|------|------|------|
| II | ① 蓄積 | ② 風潮 | ③ 業績 | ④ 貢献 |
| | ⑤ 教育 | ⑥ 特徴 | ⑦ 経験 | ⑧ 影響 |
- 7

- | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| III | ① 国際化 | ② 日本化 | ③ 西欧化 | ④ 普遍化 |
| | ⑤ 近代化 | ⑥ 民主化 | ⑦ 多様化 | ⑧ 理論化 |
- 8

問3 傍線部A「文系まで含めて日本の大学がランキング上位をめざすことは相当に難しい」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

- ① 理系分野に比べ文系分野では西欧中心主義の影響が強く、とくにアメリカが研究の中心となった社会科学の分野の多くでは、アメリカを中心とした英語圏の大学の方が世界ランキングにおいて有利になってしまい、英語を母語としない日本の大学は互角に渡り合えないから。
- ② 日本の文系分野の学問はその学問が発達した国や地域の特性を反映した価値体系に基づいている点で他国と異なっており、英語を母語としない以上、日本人や日本の大学が英語圏の大学と互角に渡り合うのは無理であるから。

- ③ 自然科学や医学、工学などの理系分野では論文発表が英語で行われることが通例化しているが、人文学や社会科学では国や地域の特性を考慮に入れた研究が重視されるため、日本の大学で英語による文系分野の研究を行っても注目を受けることがないから。

- ④ 日本の大学の理系分野では留学生や外国人教員の数、英語による論文数やその被引用数などで世界ランキングにおいて健闘しているものの、文系分野では英語圏のトップ大学と同じ土俵で競争しているわけではなくランキングで不利になるから。

- ⑤ 人文社会系の学問は西欧において学問として成立したものであり、西欧の言語なかんずく英語で書かれた研究が注目を受けやすいため、英語からもっとも隔たった言語の一つである日本語を母語とする点で日本の大学は教育・研究のハンディが大きいから。

- ⑥ 世界ランキングの理系分野では研究業績についてもそこで行われる教育においても世界共通の客観的な評価基準に基づいて評価されているが、文系分野についてはその学問が発達した国や地域の特性が反映される点で日本の大学は不利であるから。

問4 傍線部B「それ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 自然科学や医学、工学の分野では、世界ランキングの評価で、日本の有力大学の順位が振るわないこと。
- ② 自然科学や医学、工学の分野では、世界ランキングの評価で、日本の有力大学の順位が振るわない理由の一つは国際化の遅れであること。
- ③ 自然科学や医学、工学の分野では、論文発表が英語で行われることが通例化していること。
- ④ 自然科学や医学、工学の分野では、大学が立地する国の文化や歴史によって、研究成果に差が出ること。
- ⑤ 自然科学や医学、工学の分野では、知識の一般化や普遍化を前提に研究が行われること。
- ⑥ 自然科学や医学、工学の分野では、研究業績についても、そこで行われる教育においても、世界共通であること。

問5 傍線部C「ないがしろにする」の本文中の意味に最も近いものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- | | | | |
|--------|---------------------------|----------------------------|------------------------------|
| ① さげすむ | ② 忌諱 <small>きぎ</small> する | ③ 忌憚 <small>きたん</small> する | ④ 等閑 <small>たうかん</small> に付す |
| ⑤ 座視する | ⑥ 重視する | ⑦ 排斥する | ⑧ 嘲笑する |

問6 傍線部D「日本人の外国語習得の必要性を低めている」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 非西欧圏における旧植民地国の多くと同じように、日本は人文社会系の分野でローカルな自国語により教育、研究ができるから。
- ② 非西欧圏における旧植民地国の大学では理系だけでなく人文社会系でも国際化しやすいのに対して、日本の大学では人文社会系分野での国際化を重視しないから。
- ③ 日本は150年におよぶ西欧化の経験があり、外国語を習得しなくとも人文社会系の分野である程度の教育、研究ができるから。
- ④ 日本の大学では、西欧的知識の日本（語）化を可能にするため、理系分野よりも人文社会系分野における研究、教育に重点を置いてきたから。
- ⑤ 日本の大学では、自国の文化や歴史を研究する場合のみ、多くの非西欧圏の国々と異なり、西欧語で書かれた文献に頼る必要がないから。
- ⑥ 日本の大学では、150年におよぶ近代化の経験により、母語でのみならず外国語で学び、考え、研究できる蓄積があるから。

問7 傍線部E「差異化しうる視点」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **13**。

- ① 西欧中心主義の影響を受けながらも西欧で行われてきた研究とは異なる視点
- ② 日本の歴史や文化、社会を重んじることにより西欧中心主義を否定する視点
- ③ 150年をかけて向き合ってきた西欧中心主義を日本の知的資源にする視点
- ④ 西欧の知識を取り入れつつもそれ以上に日本の歴史や文化を絶対視する視点
- ⑤ 日本のみならず日本以外の国や地域も研究対象として西欧側から接する視点
- ⑥ 日本の文化や歴史といった経路に依存しつつ西欧中心主義を普遍化する視点

問8 傍線部F「日本の大学の強みに転換できる有力な知的資源となる」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **14**。

- ① 非西欧圏で先進国の仲間入りを果たした国々が増える中で、産業化や民主化を支援した日本の国際貢献が評価されることになるから。
- ② 西欧中心主義から発展したモデルでは説明できない社会の変動に対して、日本の文系学問がうまく説明すれば世界に通用する学問として評価されることになるから。
- ③ 非西欧圏の国々において産業化や民主化をはじめ先進社会をつくり出す過程に、日本という経験が有効に機能することが明らかになりつつあるから。
- ④ 非西欧圏の国々が産業化や民主化を図るに当たって、150年をかけて日本が実践してきた西欧中心主義が意味を持ちうるから。
- ⑤ 日本でも欧米での研究とは異なる視点から研究が行われていることを示せば、西欧中心主義に近づこうとする非西欧圏の多様性が認められることになるから。
- ⑥ 西欧諸国を含め西欧中心主義への批判的な見方が共有されるようになりつつある中で、日本の産業化や民主化が非西欧圏でのモデルになりつつあるから。

問9 傍線部G「アピール力のある強みを引き出すプロデュース力」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 日本発の研究であることの強みを海外よりも国内に対してアピールするような研究を提示できること。
- ② 欧米の研究とはひと味違う、日本の特性を反映させた優れた論文を掲載する学術誌を英語で発行できること。
- ③ 日本の研究が欧米の研究とは違う特徴を持つことを海外にうまく訴えられるような成果を出せること。
- ④ 海外の日本研究者に的を絞って日本発の研究が持つ良さをアピールできるだけの業績をあげられること。
- ⑤ 海外の優れた日本研究を日本国内の研究にうまく橋渡しすることができる人材を生み出せること。
- ⑥ 「国内派」の研究者よりも海外との交流もあり外国語のできる「国際派」の研究者を育成できること。

問10 傍線部H「世界ランキングの評価になじみやすい理系の研究の評価枠組みを適用した量の戦略」に当てはまらないものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 留学生の受け入れや外国人教員の採用
- ② 人文社会系の英字学術誌の発行
- ③ 一年以上3年未満の海外経験がある日本人教員の採用
- ④ 国内で蓄積された研究を外国語で出版する編集力の強化
- ⑤ 国際共著論文への執筆
- ⑥ 国際学術誌に引用される論文・モノグラフの執筆

問11

傍線部「国際貢献にも資する」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 質の高い人文社会系の学問を生み出す政策は、日本というブランド力の強化につながり、普遍的真理の追究に貢献するから。
- ② 質の強化を図るため人文社会系の学問をサポートする政策は、日本のブランド力の強化を通じて世界の経済成長や科学技術の発展に結びつくから。
- ③ 質重視の政策は、日本の大学に蓄積された人文社会科学の知的基盤を見直すことで日本の大学の世界ランキングを高めることになるから。
- ④ 質の強化を図ることで人文社会系の学問をサポートする政策は、英語のできる人材を増やすことを通じて日本の文系学問の国際化をもたらすから。
- ⑤ 質を重視する政策を採ることで、日本の文系学問のプロデュース力・編集力が強化され、「役に立つ」大学が育つことになるから。
- ⑥ 世界をよくするためには世界のことをよく知る必要があるが、多様な視点を持つ人文社会系の学問の質を高める政策は、世界の理解を深めることにつながるから。

問12 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は **18** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち。

- ① 西欧中心主義批判
- ② 多様な西欧モデル
- ③ 経験は知的資源か
- ④ 人文社会系の知識
- ⑤ 非西欧圏の国際化
- ⑥ 外国語習得の困難
- ⑦ 日本の文系の強み
- ⑧ 日本化された知識

問13

空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は **19** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち。

- ① 国際貢献を目指す文系
- ② 国際貢献を目指す前に
- ③ 文系学問の評価枠組み
- ④ 理系学問の評価枠組み
- ⑤ 国際競争力の強化対策
- ⑥ 量より質優先の政策を
- ⑦ グローバルな視点から
- ⑧ 日本が欠くブランド力

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

20

21

- ① 産業化や民主化をはじめ先進社会をつくり出す過程に、西欧モデル以外の多様性があることを認めざるを得なくなってきたため、非西欧圏に限り西欧中心主義への批判的な見方が共有されるようになりつつある。
- ② 日本の大学において英語による質の高い授業が増えていったとしても、その質が簡単に国外から見えるようになるため、こうした授業の増加はかえって日本の文系学問の強みやそれが日本の国際貢献につながる可能性を弱める結果になってしまう。
- ③ 人文社会系の学問の多くは、地域の特性を考慮に入れた知識の体系がその地域を越えて意味を持つという前提で研究が行われるため、知識の一般化や普遍化を排除する点で理系の研究とは異なっている。
- ④ オックスフォード大学では、アメリカ中心の人文社会科学から差異化することが優秀な研究者や学生、資金を引きつける知的な資源になると考えられているため、イギリスの経験をかいくぐった中国研究や中東研究が行われている。
- ⑤ 世界ランキングで日本の大学の順位を上げるといふ数値目標は、「スーパーグローバル大学創成支援事業」に典型的に見られるものであるが、英語で行われる授業や外国人教員の数を増やすことは無意味であり、日本以外の非西欧圏の国では行われていない。
- ⑥ 文系を含めた総合的な大学ランキングでは英語を母語とする国々の大学が上位を占めているため、その分野の「最先端」を学び、研究するためには、アメリカを中心とした英語圏の大学で学ぶことが必要条件だとされている。
- ⑦ 英語による「発信」の機会を増やそうという試みにより、英語で学術誌を発行する人文社会系の学会もあるが、こうした学術誌に掲載された論文が世界で広く読まれ、引用されるようになることはなく、海外の研究者に関心を持たれることはまったくない。
- ⑧ 日本では経済成長や科学技術の発展にとらわれた発想に基づき、「役に立つ」大学が重んじられ、人文社会系の学問が持つ価値は軽視されつつあるが、日本の大学に蓄積された人文社会科学の強みを再評価することは国際貢献にもつながりうる。
- ⑨ 自国の歴史や文化を研究する場合でさえ、先行研究として西欧語で書かれた文献に頼らざるを得ない多くの非西欧圏の国々では外国語習得の必要性が高いため、理系の分野よりも人文社会系の分野で国際化をとげている。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い(問1～13)に答えよ。(配点 75)

スペイン、ポルトガルは十六世紀に中南米に植民地を築き、十六～十七世紀のカカオの主要生産地をおさえた。オランダやイギリスは十七世紀に東インド会社、西インド会社を興して、海外貿易に本格的に参入していった。先発のスペイン、ポルトガルに遅れたものの、中米カリブ海諸島に、貿易拠点を築き、本国に砂糖やカカオが流入するルートを開いていった。

しかし、十七～十八世紀の中南米の主要カカオ産地はグアヤキル(現エクアドル)やカラカス(ベネズエラ)で、産地を確保しているスペイン、ポルトガルのほうがカカオの入手には依然として有利だった。十九世紀にはブラジルのバイア地方が産地として成長し、ポルトガルはさらにカカオをレンカ^aで入手できる条件に恵まれた。

甲

スペイン・ポルトガル・イタリア・フランスなどカトリック諸国で、初期のカカオ消費者になったのは、聖職者や貴族である。カトリックの各修道会は、新世界で布教活動を展開、カトリックの勢力範囲を拡大し、本国の勢力を維持することに貢献した。本国に輸入されたカカオは高価で、入手できるのは貴族層に限られていた。

一六九三年にイエズス会の宣教師がメキシコのバリヤドリド(現モレリア)にあったコレジオ(修道会の教育・学術施設)で、本国スペインの修道会宛に発信した報告の書簡がある。そこには、当地のイエズス会はカカオ農園を二つ経営し、合わせて一九万本のカカオの木を所有していること、カカオを売却して得た収入で、現地のコレジオを経営し、学院の施設拡充の費用も捻出していることと等が記されている。一七〇四、一七〇七、一七五一年にも、メキシコ内の他の拠点から本国へ宛てた書簡に、イエズス会が経営していたカカオ農園の状況が報告され、本国の教団維持費を納付していたことがわかる。^(注一) クリオ口種^(注一)の原産地オアハカにも、イエズス会が経営するカカオ農園があった。現地のイエズス会は、布教機関としての機能のほかに、現地産品の生産・交易に積極的に関与し、資金を作る経済的機能も担っていた。

現地のカカオ農園から本国の教団本部に、カカオの実物も納入されていたのだろう。一七二一年にスペインのイエズス会教団施設で、ココアの美味に驚嘆したことが文献にも記されている。イエズス会はクリオ口種の原産地にも農園を所有していたので、美味だったのはクリオ口種だったのかもしれない。ちなみに、十八世紀のスペインでは中米メキシコのソコヌスコ・タバスコ産のカカオが好まれ、南米グアヤキル産は苦味が強すぎるということで、豆のランクは低かった。クリオ口種^(注二)とフォラステロ種^(注二)に対する評価の違いがよく表れている。

カトリック修道会の教団運営の資金源として、カカオは不可欠のものだった。ここで論争になったのが、ココアは「薬品か、食品か」「飲み物(液体)か、食べ物(固体)か」という問題である。カトリックには、春のイースター(復活祭)前の四旬節などに断食する習慣があった。「薬品」であれば断食中も摂取「可」、^A「食品」は「不可」だった。また、「液体」は摂取「可」、固体は「不可」だった。

ココアの宗教的論争

ココアをめぐる宗教的論争は「薬品か、食品か」「液体か、固体か」だった。カカオが栄養価に富み、健康増進に効果的であることは、経験的に認められていた。^(注三)カカオマスを湯に溶いて、泡立てたドロドロの状態は、液体、固体のどちらにもあてはまりそうだった。栄養が不足する断食期間に、滋養に富むココアを摂取できるほうがカトリック教徒たちには好ましい。一五六九年にローマ教皇ピウス五世は、実際にココアを味わって、「飲料であり、断食中に摂取して可」という判断を示した。

しかし、「脂肪分に富み、体温を上昇させる効果がある」等を根拠に、食品であると主張し、^B戒律違反を批判する医者が跡を絶たなかった。「薬品か、食品か」という論争は十六〜十七世紀には一〇〇年間にわたって続いた。砂糖を入れたココアは実際に美味に感じられ、ココアの機能を「薬品」に限定する ア といえよう。

このように、十七世紀に「薬品か、食品か」を問われた新来の産物はカカオに止まらない。十七世紀には茶、コーヒー、ジャガイモ、トウモロコシ、タバコ、トマトなど、新世界から到来した産品が増えた。社会のなかで新奇な物産をどのようなカテゴリーに位置づけるべきか論争が起きた。未知の味に X されて口にすることを、「悪」とみなす宗教的キハ^bンも強かった。エデンの園の「リンゴ」が、人間の原体験として重要な意味を持つ宗教的環境であったから致し方ない。

新来の産物はおもに二つの論争を経て、食品として徐々に受け入れられていった。宗教的論争と医学的論争である。砂糖も同様の Y をたどった。十二世紀に『神学大全』を記したイタリアの神学者トマス・アクィナスは、「砂糖は消化促進に効果がある。薬品である、食品ではない」という結論を述べた。医学的に権威があったイタリア・サレルノの医学校の医学書にも、砂糖に薬効があることが記されていた。

医学的権威に拠^よって「薬品」として認められることは、宗教的批判に対抗する手段になった。結論が出ない論争に、聖職者や医者が延々と関わり続けている間に、貴族層は新来の味を試し、美味に慣れていった。需要が増し、新来の産品の流入量が増えて、価格がいくぶん低下し、新来の味は貴族層から市民層に広がっていった。

カカオの医学的論争

カカオは実際に栄養価に富み、薬効があったから、「薬品」として着実に定着していった。当時の医学理論にもとづくと、カカオの薬効はおおよそ次のようなものだった。

中世のヨーロッパでは、体液病理説という医学観で、病気の診断が下され、薬が処方された。体液病理説は、古代ギリシャのヒポクラテスが創始し、ガレノスが発展させたといわれている。人体には、血液、粘液、胆汁、黒胆汁の四つの体液があり、バランスが良ければ健康、崩れて病気になる。四つの体液は、「熱」「冷」と「乾」「湿」の組み合わせ I 通りのいずれかに分類される。病気を直すには、原因と正反対の薬品が処方された。「熱・乾」がまさって病気が起きている場合は、「冷・湿」の薬が処方された。

カカオをはじめとする新来の産品は、体液病理説にもとづいて、「熱」「冷」と「乾」「湿」の II 通りのいずれに該当するか、分類が試みられた。体液病理説によれば、ある一つの物

産は、Ⅲ 通りのいずれか一つだけに該当する。二つ以上に該当することはありえなかつた。

ところが新来の産品をめぐって、体液病理説に混乱が生じた。たとえばカカオには「冷・乾」と「熱・湿」の両方の性質が見られた。正反対の性格である。それまで、体液病理説では、同一物が正反対の性格を兼ね備えることはなく、学説的にそのようなものはありえなかつた。新来の産品のなかには、体液病理説のⅣ つのカテゴリーにうまくはまらないものが出てきたのである。ちなみに、カカオの「冷・乾」は、ポリフェノールの苦味・渋味を表現し、「熱・湿」は脂肪分が多く、ミネラルに富む点を表現したものでろうと考えられている。

スペイン、メキシコ、ポルトガル、イタリア、フランスの医者の中で、ココアは「冷・乾」か、「熱・湿」かをめぐって論争が生じた。処方が必要とする状況が正反対なので、医者にとつても重大事である。

たとえば、スペイン・セビリヤ出身で、メキシコに移住した医師ファン・デ・カルデナスは、一五九一年出版の自著に次のような見解を記した。カカオは本質的に「冷・乾」である。摂りすぎると、体液の循環が悪くなり、憂鬱質が増す。摂りすぎをセツセイしなければならぬ。栄養に富み、脂肪が多い点は「熱・湿」である。かすかな苦味も感じられ、これは「熱・乾」を示唆している。この苦味成分は、胃の消化を促進する。カカオには、異なるⅤ つの性格が認められる。

Ⅵ つの性格のうちのいずれかを際立たせるように処方するといふ。

体液病理説にもとづく医学観では、カカオの多様な効能を筋道をたてて説明することは難しく、その後も医者^cの論争は続いた。やがて、医学そのものが体液病理説を脱して、血液循環説へと移行していった。

カカオ、ココアの受容をめぐって、このように聖職者や医者^dがカイザイして、長期にわたる論争を繰り広げた。カカオに関心が集まり、社会的に浸透しつつあったことの反映だったといえよう。

乙

カカオが「冷・乾」であるか、「熱・湿」であるかはともかくとして、健康増進に効果的であることは経験的にも支持され、カトリック諸国の貴族の間でココアは「薬品」として、飲む習慣が広まっていた。

スペイン宮廷では、すでにカルロス一世の時代（一五一六～五六）に、征服者コルテスからカカオについての報告が届いていた。次のフェリペ二世の時代、一五八〇年にスペイン王はポルトガル王も兼ねることになり、「太陽の没することなき大帝国」^D が出現した。のちにポルトガルの宮廷には、「チョコラテイロ」と呼ばれる宮廷ココア担当官が設けられた。

宮廷ココア担当官には二つの役割が課せられた。一つはロイヤル・ファミリーや宮廷貴族にココアを供する責任、もう一つはポルトガル軍のために設けられた王室病院でカカオを処方し、カカオを備蓄する責任である。^E

宮廷ココア担当官の役割には、宮廷でココアを供するとき、豪華に演出することも含まれていた。十七世紀のスペイン宮廷では、王女が主催した軽食会で、ココアが出され、そのときテーブルには、

豪華に盛りつけた砂糖菓子、数種のコンフィチュール（果物の砂糖漬け）、ビスケット、砂糖壺が並んでいた。ココアは磁器製のカップに注がれ、受け皿は瑪瑙製で、金の縁取りがしてあった。客は、高価なカップで、ココアをタンノウし、ビスケットをココアにひたして食べた。

カカオは高価な到来物で、客に提供できることは経済力のあかしだった。ココアだけでなく、茶やコーヒーの場合も同様で、経済的資源や権力を有していることを最大限にアピールするパフォーマンスが繰り広げられた。そのような場面に欠かせないものの一つが砂糖だった。舶来の砂糖をふんだんに用いたデコレーションや、豪華に盛りつけた砂糖菓子は権力のシンボルだった。砂糖やココア、ポットやカップをシュウトウに準備して、権力パフォーマンスの場面を演出し、取り仕切ったのが宮廷ココア担当官である。

また、宮廷ココア担当官は医学的知識を持ち、王室病院でポルトガル軍兵士へのカカオの処方に関わった。のちにブラジルのバイア地方がカカオ生産地として成長し、ポルトガルはカカオをふんだんに入手できる条件に恵まれた。滋養に富むカカオを傷病兵の治療に用い、また、カカオマスからココアバターを抽出し、皮膚薬として患部にトフした。ポルトガルは熱帯、亜熱帯に植民地を多く擁していたが、本国とは異なる気候で、多くの兵士が皮膚病を発症した。植民地の軍病院、ポルトガル海軍の軍船には、ココアバターが皮膚病の治療薬として常備された。

宮廷ココア担当官は、カカオを通じて二つの役割を担い、二つの階級に関わった。貴族階級と、植民地で軍役に従事する兵士階級である。二つの階級にカカオの効能を伝え、帝国の政治力・軍事力の維持に貢献していたのである。

（武田尚子『チョコレートの世界史―近代ヨーロッパが磨き上げた褐色の宝石』中央公論新社2010年）

（注一） クリオロ種：ポリフェノールの含有量が少なく、苦味が少ない品種。

（注二） フォラステロ種：ポリフェノールを多く含み、苦味が強い品種。

（注三） カカオマス：発酵させたカカオ豆を炒って粉にしたもの。チョコレートなどの原料となる。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問3

空欄

I

VI

に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

⑨	I 四	II 四	III 四	IV 四	V 四	VI 二
⑧	I 四	II 四	III 四	IV 四	V 三	VI 三
⑦	I 四	II 四	III 三	IV 二	V 二	VI 二
⑥	I 三	II 三	III 二	IV 四	V 四	VI 四
⑤	I 三	II 三	III 三	IV 三	V 四	VI 四
④	I 三	II 三	III 三	IV 二	V 二	VI 二
③	I 二	II 二	III 四	IV 三	V 二	VI 四
②	I 二	II 二	III 二	IV 三	V 三	VI 三
①	I 二	II 二	III 二	IV 二	V 三	VI 三

問4

空欄

ア

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 経済的効果を評価することには批判があった
- ② 宗教的環境を整備することには葛藤があった
- ③ 政治的意味を考察することには限界があった
- ④ 医学的権威を無視することには疑問があった
- ⑤ 歴史的背景を尊重することには抵抗があった
- ⑥ 社会的合意を形成することには無理があった

問5 傍線部A「カカオの実物も納入されていたのだろう」と推測する理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 中南米の植民地経営初期、カトリック諸国でカカオ消費者になったのは聖職者や貴族であつたから。
- ② 一六九三年には、バリヤドリッドにあつたイエズス会は一九万本のカカオの木を所有していたから。
- ③ 一七〇四、一七〇七、一七五一年に、メキシコ内の拠点から本国の教団維持費を納入していたから。
- ④ 現地のイエズス会は、布教機関としての機能のほかに、資金を作る経済的機能も担っているから。
- ⑤ 一七二一年に本国のイエズス会教団施設で、ココアの美味に驚嘆したという記録が残っているから。
- ⑥ 十八世紀以降のスペインでは、中米メキシコのソコヌスコ・タバスコ産のカカオが好まれているから。

問6 傍線部B「戒律違反」の説明として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① カトリック修道会の教団運営の資金源にカカオを利用すること。
- ② 春のイースター前の四旬節などに断食する習慣があること。
- ③ 薬品であれば断食中も摂取可であるとする事。
- ④ 断食中に液体は摂取可とすること。
- ⑤ カカオが健康増進に効果的であると認めること。
- ⑥ ココアを飲料とみなし断食中に摂取すること。
- ⑦ ココアは食品であると主張すること。
- ⑧ 砂糖を入れたココアを美味に感じてしまうこと。

問7 傍線部C「カカオの多様な効能を筋道をたてて説明することは難しく」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 処方が必要とする状況が正反対なので、医者にとってもカカオの性格は重大事だから。
- ② カカオは摂りすぎると体液の循環が悪くなり、憂鬱質が増すから。
- ③ カカオは優れた薬材であるが、香辛料で調整して処方することが求められたから。
- ④ 体液病理説では、同一物が正反対の性格を兼ね備えることはありえなかったから。
- ⑤ 医学そのものが体液病理説を脱して、血液循環説へと移行していったから。
- ⑥ カカオの受容をめぐる長期の論争は、カカオが社会へ浸透することの反映だったから。

問8 傍線部D「太陽の没することなき大帝国」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **36**。

- ① 太陽が沈まない夢を領土に拡散する征服者のカトリック国家であること。
- ② 太陽が沈まない白夜の極地まで領土として保有する巨大国家であること。
- ③ 不滅の太陽を領土保全に擬する遠大な理想を高く掲げた国家であること。
- ④ 不滅の太陽を領土の栄光と尊厳に結びつける永遠の超越国家であること。
- ⑤ 保有する領土のどこからでも太陽を観察観望できる高地国家であること。
- ⑥ 保有する領土のどこかで必ず太陽が出ている版図広大な国家であること。

問9 傍線部E「カカオを処方し、カカオを備蓄する責任」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **37**。

- ① 滋養に富むものとしてカカオを傷病兵に与え、また、皮膚病を発症した兵士には皮膚病治療薬としてのココアバターを患部に用いるため常備したこと。
- ② スペイン王がポルトガル王も兼ねるようになると、ポルトガルの宮廷に「チョコラテイロ」と呼ばれる宮廷ココア担当官が設けられたこと。
- ③ 王女が主催した軽食会でココアを出すとき、テーブルには豪華に盛りつけた砂糖菓子、数種のコンフィチュール、ビスケット、砂糖壺を並べること。
- ④ ココアは磁器製のカップに注ぎ、受け皿は瑪瑙製で金の縁取りを施し、そのココアにビスケットをひたして食べるように提供したこと。
- ⑤ カカオを客に提供できることは経済的資源や権力を有していることのアかしであり、そのことを最大限にアピールするためのパフォーマンスを繰り広げること。
- ⑥ カカオを通じて二つの役割を担い、二つの階級にカカオの効能を伝え、帝国の政治力・軍事力の維持に貢献したこと。

問10 傍線部F「のちに」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **38**。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| ① 中世 | ② 十五世紀 | ③ 十六世紀 |
| ④ 十七世紀 | ⑤ 十八世紀 | ⑥ 十九世紀 |

問11 空欄

甲

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

39

- ① 初期のカカオ農園主——聖職者と貴族
- ② 新世界での布教拠点コレジオ——教育と学術
- ③ カカオ農園の経営——コレジオの経営と学園の施設拡充
- ④ イエズス会——布教活動と経済機能
- ⑤ カカオの納入——クリオ口種とフォラステロ種
- ⑥ カトリック教徒の問い——薬品か食品か

問12 空欄

乙

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

40

- ① 貴族層の受容——ココアと権力のパフォーマンス
- ② 健康増進の効能——薬品としての摂取
- ③ チョコレイロ——フェリペ二世の時代の宮廷文化
- ④ ココアの宮廷での提供——豪華な演出と調度品
- ⑤ 宮廷ココア担当官の役割——医学的知識とカカオの処方
- ⑥ 二つの階級——貴族階級と兵士階級

問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

41

42

- ① カトリック修道会の教団運営の資金源として、カカオは不可欠のものだったため、豆のラックを左右する渋みに対する評価の違いは、ココアは「薬品か、食品か」「飲み物（液体）か、食べ物（固体）か」という重大な論争を引き起こした。
- ② ココアは「薬品か、食品か」の結論が出ない論争に聖職者や医者が延々と関わり続けている間に、新来の茶、コーヒー、ジャガイモなどの産品の需要が増して流入量が増え、ココアの流入量も同様に増えたため、その味は貴族層から市民層に広がっていった。
- ③ 医学的知識を持つ宮廷ココア担当官は、本国とは異なる気候で皮膚病を発症したポルトガル兵士の患部へカカオを処方するため、植民地の軍病院などにココアバターを常備することにより、権力パフォーマンスを演出する役割も担っていた。
- ④ 十七世紀のスペイン宮廷の軽食会テーブルに、豪華に盛りつけた砂糖菓子と並んでいたのは、実はココアではなく砂糖菓子こそが権力のシンボルであったためであり、砂糖を用いて権力パフォーマンスの場面を演出し、取り仕切ったのが宮廷ココア担当官である。
- ⑤ 一六九三年にメキシコのイエズス会宣教師が本国に宛てた書簡によれば、当地のイエズス会はカカオ農園を二つ経営し、合わせて一九万本のカカオの木を所有していることや、その収益で本国の教団維持費を納付していたことがわかる。
- ⑥ ココアが医学的権威に拠って「薬品」として認められることは、宗教的批判に対抗する手段になり、「砂糖は消化促進に効果がある。薬品である、食品でない」と述べた十二世紀のイタリアの医学者トマス・アクィナスの見解などに、その先例が認められる。
- ⑦ カトリックの各修道会が新世界で布教活動を展開した初期の頃、聖職者たちはカトリックの勢力範囲を拡大して本国の勢力維持に貢献したが、本国に輸入されたカカオは高価で、入手出来るのは貴族層に限られており、聖職者はカカオを賞味できなかった。
- ⑧ オランダやイギリスは十七世紀に東インド会社、西インド会社を興して、植民地経営に遅れて乗り出し、中米カリブ海諸島に貿易拠点を築いて、本国スペイン、ポルトガルに砂糖やカカオが流入するルートを開いていった。
- ⑨ 体液病理説は、四つの体液のバランスによって健康や病気を判断する医学観であり、四つの体液が「熱」「冷」と「乾」「湿」の組み合わせに分類され、「熱・湿」が原因の病気を直すには、原因と正反対の「冷・乾」の薬品が処方された。